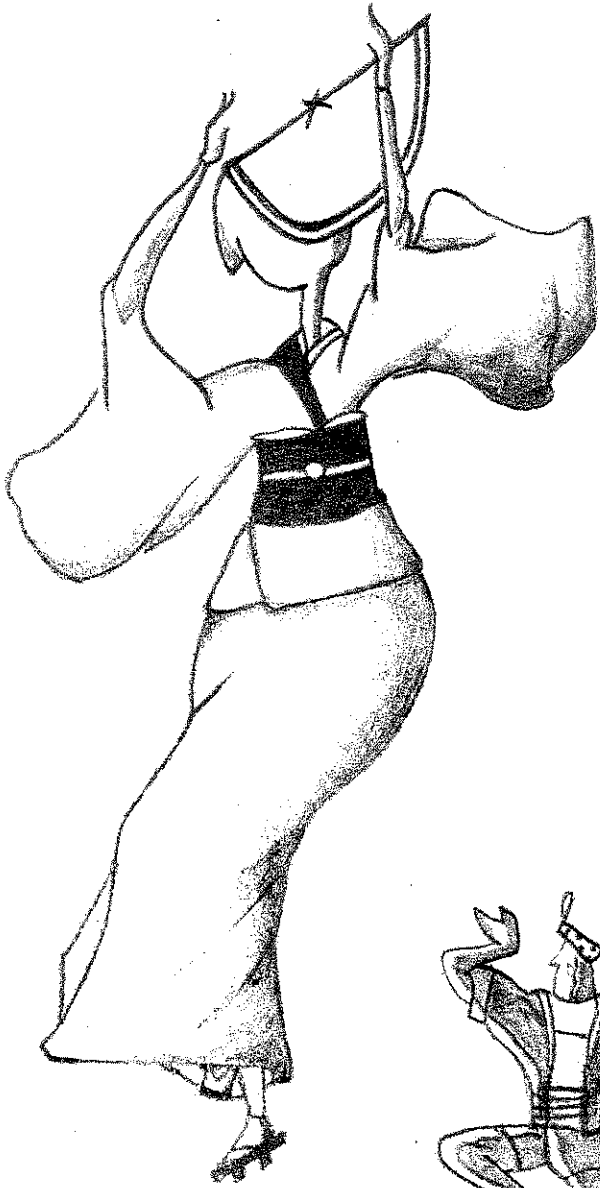


あわおどり



高円寺の十八年

関根敏邦

目次

一	その起り	1
二	存亡の別れ道	9
三	阿波踊り開眼	15
四	規模のひろがり	20
五	独立連の誕生	28
六	徳島との交流	33
七	他商店街との交流	39
八	発展につぐ発展	43
九	舞台をつくる人々	48
十	高円寺踊りのルール	51
十一	将来の展望	56
十二	阿波踊り雑感	60

資料一 昭和四十八年度参加連一覽表……………67
資料二 踊り路線図……………68

あとがき……………69

落穂集（「ひろば」より転載）……………71

題字 城石昇
表紙 絵 新山節子

序

人には人生がある様に、時代には歴史のある如く、高円寺阿波踊りにも記録が是非欲しいと思っていた。昭和三十二年に誕生した阿波踊りが今日に至る迄十八年間、よくも続き、よくも成長をとげてきたものだ。と私自身驚きと、なにか奇異な感がしないでもない。僅か「青年部まどか会」という若々しいグループが青春のエネルギーをそそぎこんで、白粉と汗にまみれた真剣な顔立ちとなにやらわめき手足を躍動させたスタート時代がなつかしい。なんとか高円寺の宣伝にもと、あの緊張の一瞬が想い出される。

阿波踊りが地肌の違う高円寺という土地柄に、今では、なんの異和感も感じさせずあなたかも生まれるべくして生まれたと思わせるのは何故だろうか。踊りは平和の一つの象徴であり、これに参加せる人の無私なる心と、団結と、共に喜ぶ連帯感が共感を呼び起こすのではないだろうか。阿波踊りが本場徳島を離れて好んで高円寺に定着し安住してしまった感がある。高円寺阿波踊りの日記は未だ手垢で汚れる迄には至っていない……がその日記の一言毎に苦難や、喜び

や、楽しさで満ちあふれ、その時あの時の風景が書き残されているに違いない。いや書き綴られているべきである。

しかしその日記が分散され遺失されつつあるとすれば、だれかこれをまとめ、保管して貰わねばならない。私自身かく思い、かく念じ、いずれはと思っただけだが、思いは思いだけで、多忙と言ひ言訳で空費してしまつたが、今回はからずも名文でなり達筆家として知られる関根敏邦氏が、「あわおどり高円寺の十八年」と題し私共念願の書が発刊されると聞き、わが事の如くうれしく、私共にとり記念すべき貴重なる書として、又地域のみなさん、及関係各官庁のみなさんの御協力で益々盛大になるであろう今後の高円寺あわおどりの礎石ともなる書として、発刊される御努力に対し厚く感謝申上げ、「続あわおどり」として続刊される事を祈念してやみません。

小 沢 淳 男

あわおどり

高円寺の十八年

関 根 敏 邦

一、その起り

高円寺で十八年前つまり昭和三十二年から阿波踊りをやっているというところから始めて聞く人は、高円寺と徳島との関連性を問う。

今でこそ、東京中十六ヶ所で阿波踊り大会が開かれ、別にそれを異と思わぬ程になつたけれども、十八年前に東京の商店街で阿波踊りを年中行事としたのは、高円寺だけである。

当時、在京の阿波踊り連といえ、深川の木場連（今の天恵連）だけで、

その木場連が、ところどころの盆踊りにゲスト出演する程度のものでしかなかった。私達も、その頃は「阿波踊り」という言葉は知ってはいたが、それが、どんな踊りなのか、皆目知らなかったし、木場連の存在等、知るはずがなかった。

だから、高円寺と徳島の関連性といったところで、何もなかったという他はない。

それなのに何故、阿波踊りを始めたかといえば、それは、こんな事情である。

その年に高南商盛会（今の高円寺南商店街振興組合）に青年部が結成された。八月始めの事である。結成の旗上げに、何か威勢のいいことをやって氣勢をあげよう。丁度、その月の二十七日、二十八日に氏神様の祭礼がある。この時に大きな神輿を借りてきて、皆でかついだら、という話が出た。ところが、青年部のメンバーを見ると、とても神輿をかついで氣勢をあげるといふような顔振れではなかったし、横文字ムード全盛の時代に神輿という復古調には、気がすすまぬ空気であった。

あれか、これか、と思索している間に、当時、宝橋（桃園川にかかっていた橋）のそばで、魚屋さんをやっていた茂木晴吉氏が、「踊り」を提唱した。それも普通の盆踊りではつまらない、この町内には、空地がないから、道路

を使ってやる踊り、つまり阿波踊りがよいと云い出したのである。

「うまくいけば、名物になるかも知れないよ、是非やるべし」と力説されて、始めの内浮かぬ顔だった連中も、なんとなく説得された恰好で、とうとうこれに決まってしまったのである。

「でも、どうやって踊るんですか、茂木さん判ってるんですか。」

「判らない、でも、去年、徳島で見たところによると、そんなにむづかしいもんじゃない、誰か、民踊の先生をつれてきて教われば誰でも踊れるさ」随分、無責任な話だが、「まあ、なんとかなるだろう。やってみようじゃないか」天野清一郎青年部長の言葉で、つい、その気になったのが、高円寺で阿波踊りが始まったそもそのいきさつである。

早速、立花流の先生を頼んできて、練習が始まった。今思えば、噴飯ものだが、先生いわく、「これが阿波踊りというものを、一所懸命習い始めたのである。手を上げたり、下げたり、一歩進んで二歩さがり、二、三歩飛んで見得をきくという、阿波踊りとは似ても似つかぬものを、大真面目に練習したのであった。なまじ、踊りの手順が決まっているだけに、無器用な私達には大変むづかかった。何度練習しても順を間違えるのである。さすがに先生もサジを投げ、

「私が、一番前で踊りますから、私のやる通りマネをして下さい」とい

ことになる。「高円寺阿波踊り」とはいわず、「ばか踊り」と称したのは、賢明な処置であった。

扱て、初日、約三十名の青年部員は、悲壮な表情で、集合地の長仙寺境内へ集った。揃いの祭りユカタに足袋はだし、ハチマキ姿は、一見威勢のよい「おあにいさん」と見えたものの、内心「こりゃ、えらいことになったわい」と、ひどく落着かない。一人一人、先生が入念に顔を作り、誰が誰やら判らぬ程に、白粉を塗りたくった。おはやしは、チンドン屋である。その時の録音を聞くと、このおはやしは「佐渡おけさ」に似ていた。本物の阿波踊りを先生も知らず、チンドン屋も知らず、それを本物の阿波踊りと信じこんでいた私達を誰が笑うことが出来ようか。

さて、出の時間になった時の私達の緊張ぶりは、涙ぐましいものであった。足はガクガク、胸はドキドキ、

「ああ、家へ帰りたいたい……」誰かが云った。その言葉を、今でも実感をもつて思い出す。

横丁から通りへ出て見ると、何事ならんやと集った人垣を正視出来ない。皆、下を向き、一目散に突走る。今では三十分もかかる踊り場を、ものの五分位で踊ったのだから私達の狼狽振りはおして知るべし、それは踊りではなく、最初の休憩地点への競歩の如くであった。現在、実行委員長を勤めて

おられる小沢淳男氏、同じく副委員長の城石昇氏等も、当時は踊り子の一人で、もともと大柄な為に、後の方に居たのだが、初めから終りまで走りっぱなしだったそうである。

更に可笑しいのは、顔である。暑いから汗がふき出す、顔をふく、塗られた白粉、まゆ墨、口紅が顔いっぱい散乱して、まるで化け物であった。

こんな状況ではあったが、とにかくにも「第一回高円寺ばか踊り」は無事終了した。

二年目には「鳴子」を使用した。カタカタと音を立てる鳴子は、なかなか調子のよいものだったが、前年と違った振つけで、これを覚えるのに、又々一苦労であった。

三年目から、立花先生に替って、西崎まゆみ先生が指導にあたる事になったが、何故、先生を替える事になったのか、その理由は私には判らない。新しい先生は女性だけに振つけがこまかく、不器用な私達としては大変に困ったのを記憶している。三回目か、四回目の事である、西崎先生の関係で、当時、松竹歌劇団の作曲家であった関口典之先生のすすめもあって、唄をつくる事になった。青年部の幹部四、五人がカンヅメにされ、作詞することに、一人一作ということで、随分珍妙な作品が出来たらしいが、残念乍らそのひとつひとつの記録がない。結局、小沢淳男氏と、河原広氏の合作で、

「高円寺音頭」なるものが出来上がり、これが採用されて、先生が曲をつけた。この唄を覚える為に、連日連夜、長仙寺の本堂で、蛮声を上げたのを、なつかしく想い出す。この唄は、作詞作曲共、なかなかよいもので捨てがた

50。
阿波踊りとは別に、高円寺の唄として、永く残しておきたいので、ここで御紹介しておこう。

” 高円寺音頭 ”

ハアー春が来たとき、ネオンの街にさ

憶い出すのよ あの街角を ソレ

わたしや燃えまます恋ごころ

ヤンレヤンレヤンレヤットナ

イッサイガッサイ高円寺

ハアー夏が来たとき ネオンの街にさ

娘くれよか むこさんどろか ソレ

踊る若衆 花ざかり

” 以下同じ ”

ハアー秋が来たとき ネオンの街にさ

いとしあなたと 手に手をとって ソレ

うれしはずかし 晴姿

” 以下同じ ”

ハアー冬が来たとき ネオンの街にさ

あの道 この道 ほのぼのと

雪の降る夜の語り草

” 以下同じ ”

この年はおかしい思い出がある。おはやしの屋台を作ることになり、かと言って本格的なもの出来はしないから、四角いワクだけをつくり、これにマイクをしこみ、このワクの中に囃方を入れたのであった。

このワクを持つのは、アルバイトの学生である。この学生たちに、唄を歌わせる為に、たった一日稽古をした。何せ、一夜漬けだから、本番ではでんで調子はずれ、使いのにならず、結局、小沢淳男氏と、中居誠一郎氏が交替で歌う破目になる。

というよりな次第で、高円寺の阿波踊りは曲りなりに走り始めたのだが、

その後、今日の隆盛を見るに至るまでには、いろいろな曲折があった。
最初の危機は、三年目に現われた。

二、存亡の別れ道

当時の阿波踊りの主体をなしていたのは前述したように高南商盛会の青年部員であったが、部員の労苦は並大低ではなかつた。準備の大部分を自分達で行い、しかも踊るのも自分たちである。無論、規模は今と較べれば小さなものだったから、準備といっても今程、大がかりではない。しかし、やったことのない仕事だから、それなりに苦心を重ねたものである。

踊り場は、中央線のガード（当時は踏切）から桃園川までの全長約二五〇米の商店街で、その間を、三、四十人の一連が往ったり来たりするだけの極く狭いものであったが、しかし、いかに小規模とはいえ、天下の公道を占拠する仕事である。当然警察の許可が必要であった。

踊りの準備は、先づ警察の承認をとることから始まる。これが大変な仕事であった。今と違って当時は車優先の時代で、道路は車が走るところというのが一般常識だったからいかに祭礼関連行事とはいっても、一定の時間、車の通行をストップする等は論外とされていたのである。ある時は全員で、ある時は小人数のグループで何回となく警察へお願いに行く、「駄目だ、駄目

だ」というのを何とか拝みたおして、「今年だけだぞ」の条件つきで許可をとる。それから会場設営の用意と踊りの練習にとりかかる。踊り手募集も一仕事、一軒々々訪問して出場を懇請する。本番を迎える頃にはヘトヘトである。それでもいい、本番で、その労苦が完全に報いられるならば。

だが観客もさして多くなかったし第一踊りそのものに全く自信がない、将来の見通しも明るくはなかった。だから仲間うちから徐々に反対論が出て来たのは少しも不思議ではなかった。第三回目の準備が始められようという頃の事である。にわかに反対論者がふえ始め、会合の度に白熱の議論である。とうとう結論を無記名投票で決めることになった。結果は、たった一票の差で継続となったのだが、この一票が、その後の高円寺の命運を定める事になった。この一票なくば、今日、隆盛どころか、「昔そんな事やったことがあったなあ」と時たま思い出す位のものになっていただろうし、東京中に阿波踊りがひろまることもなかったかも知れない。反対論の主たるものは、大凡次の様なものであった。

一、広い意味で宣伝に役立つかも知れないが、即物的な意味での商業政策上はマイナスである。

二、雨天順延が認められていなかったから、もし当日雨が降ればすべてが水泡に帰す。

三、経費がかかり過ぎる。

四、踊りそのものに全く自信が持てない。

等々。要するに「無駄使い」に近いというものである。

その後数年間の実績により、これらの問題点の幾つかは解決された。雨天の場合は一日だけ順延が可能になったし（現在は八月末日まで順延可能）経費は規模の増大の比率程には増していない事（勿論、絶対額はふえている）踊りは年々技術向上が見られ、本場にかなり近いものになってきた事である。しかし乍ら今だに解決されないのは第一の問題点、商業政策上プラスにならぬ事である。踊り当日には横丁の飲食店等には客のあふれるのを見るのであるが、肝心の商店街に面するお店は閑古鳥が鳴いている。お客様がお店に背を向けて踊りに熱中するからである。どうにかならぬかという声を聞く、正直な話よいチエが浮かばない。私は現在、商店会の事業部長の役職をもっているのだが、その私がお手上げなのだから仕方がない。だから私はそういう声に接すると、こんなふうに答えることにしている。

「一年三百六十五日の中のとった二日間のお祭りです、商売になるか、ならぬかそんな事考えるより、あなたも踊ったらどうです。人間に無駄が必要ないように、商店街にも無駄があってもよいではないですか、それとも、あなた、無駄なタバコや酒をやめられますか」と。無茶な論理だが、こうでも云

う他はない。

話を元へ戻そう、三年目の危機は一票の差をもって乗り切った。ところが四年目に次の危機が訪れた。

警察が何としても首を縦に振らないのである。「昔からの伝統的行事でさえ認めないというのが、本庁の意向だ」というのである。「この交通難の折に、道路を占拠する行事は時代錯誤」と云わんばかりであった。

準備開始の期日は迫るし、にっちもさっちもいかなかった。遂に名物になり得ずして、三年間の労苦は水泡に帰するかと、暗澹たる気持ちであった。しかし、出来る限りの手は打とう、中止するにしても、心残りのないだけの努力を尽そうじゃないか、ということ、警視庁へ陳情することにした。今は故人になられた山崎芳次郎都議に同道してもらい、本庁の交通部長を訪ねたのである。当時の青年部長、小沢淳男氏、小倉盛氏、それに私が同行した。本庁の壁は厚かった。「一商店街の宣伝行事の為に道路を使わせる訳にはいかない、祭礼関連といっても、昔からやってた訳ではないでしょう」

「宣伝が目的ではありません。どちらかといえばレクリエーションの要素が強いから……」

「この行事は、青少年の非行防止に役立っていますよ、部長さん……」
と山崎都議が口添えすると

「ほほう、阿波踊りをやると、非行防止になるんですか？」

これは珍説と云わんばかりの表情に、私達は絶望的なものを感じていた。

「山崎先生の口添えもあることだから、一応検討はいたしましたしょう。しかしあてにしないで下さい」

これが、この日の結果であった。十中八、九は駄目というのが私達の見方だった。このことが皆に伝えられると、或る者は悲しげな表情をし、或る者は怒り、又、或る者は、それが当然という顔をした。前年、一票の差をもって実施と決まり、今年は全員が気持を揃えてやる気になっていた。その結果が音をたてて崩れてゆく。これではいけない。

ここに到って小沢淳男氏は遂に強行策に踏み切った。もし不許可になってもやってしまおう。

万一、検束される事あらば、留置場で踊ろうじゃないか。キット新聞ダネになつて宣伝になる。皆、その時はよろしく頼む。と悲壮な決意を固めたのであった。

幸いにも数日後、許可が通告されたので、この留置場踊りは不発に終わったが、その時は本気でそう思ったものである。

許可にはなったものの、二十七日、一日限りとの厳しい条件つきだった。過去三年、二日間やっていたものを、この年は、たった一日しか許されない。

口惜しいことであったが、万止むを得ない。歯を喰いばる思いで、許された一日を力いっぱい踊り抜いたのである。

この三年目、四年目の危機を何とか切り抜けたのが、やがて、五年目からの発展の礎石を作り出すこととなる。

今日、毎年八月二十六日になれば、既成の事実として、阿波踊りが賑やかに繰り展げられる。踊り子達は、何の疑いも持たずに、踊りまくる。しかし高円寺阿波踊りの創成期には、たった一日、踊るために、どんな労苦を強いられたか、当時の高南商盛会青年部の心境に思いを馳せるべきであろう。

三、阿波踊り開眼

高円寺ばか踊りも五年目を迎える頃になると、徐々に反対論も陰をひそめ、夏の訪れを聞くと当然の事のように準備が始められるようになった。踊り子も、女子、子供も加って少しづつ増えて来たし、将来の展望についても幾分明るいものが見え始めて来たのである。

この行事が定着しつつある感が深まってくると共に、冷静にこの行事を考えるゆとりさえ出来てきたのである。反省は踊りそのものに向けられた。阿波踊りは郷土芸能である、だから踊り方にも一定のパターンがあつてしかるべきなのに、今までやって来たのは先生の振つけによる立花流阿波踊りであり、西崎流阿波踊りである。更に「ばか踊り」というのも感心しない、いつの日にか堂々と「高円寺阿波踊り」と称して、本物をやろう、こういう声が大勢を占め、それから本物探しが始つた。徳島県人会や、徳島県東京事務所等に相談を持ちかけ、そうして紹介されたのが深川木場の鴨川さんである。早速、鴨川さんにお願ひして、とにもかくにも木場連に来てもらい踊つてもらふことになった。この年には地元連の中に木場連の人十五名程加わり、つ

まり混合編成でやったのだが、初めて見る本物の阿波踊りと本物のおハヤシに目を見はる思いがしたものである。鴨川さんとの接渉は主として小沢淳男氏と黒田竜太郎氏がこれに当った。

翌六年目（昭和三十七年）には、本格的に鴨川さんの指導を受けることになる。夜、青年部有志約十名が深川迄参上し、材木が浮ぶ堀割ぞいにある鴨川商店の製材工場二階の座敷で、踊りと鳴物の手ほどきを受けたのであった。初めての夜、鴨川さんが「ひとりづつ踊ってみよ」という、実のところこれには大変困った。皆、〇〇流阿波踊りの優等生ではあったが、本物はさっぱりである。大いにテレながら、手を上げたり下げたりのていたらしく。

「皆さん駄目ですね、阿波踊りになってない、ただあなただけがいくらか阿波踊りに近いものになっている」といって指さしたのが、他ならぬ神藤信一君である。その頃の神藤君の踊りは手の振り、足の運びが大きくて、〇〇流を見なれた私達の眼には、「踊り」というより「あばれ」「みたいに見えたものである。その神藤君の踊りがほめられたのだから、その時以来、信ちゃんが高円寺に於ける阿波踊りのチャンピオンとして尊敬を集めることになる。これに力を得た為か、これ以後の信ちゃんの伸びは大したものであった。年毎に腕をあげ、数年の間に、ほぼ完全な阿波踊りを身につけ、現在、天狗連のトップスターとして、押しも押されぬ地位にあるが、それは後の話、

鴨川さんの指導を受ける頃は、彼も、その他の者も五十歩、百歩というところで、一所懸命踊ったり、鳴物をたたいっていたのであった。

鴨川さんのところには、三回位通ったと記憶する。おこがましい話だが僅か二週間程の練習で、二組のおハヤシチームを作り上げたのである。こうして第六回大会で始めて地元編成のおハヤシが華々しく登場する事となる。

地元のおハヤシが出来た関係で、この年からは木場連と地元連は別々の連として行動することになり、複数の連が踊ることになった、これが最初の年である。

この年、記録さるべき事項として、初めてのテレビ出演がある。「東京の阿波踊り」という四国向けのローカル番組ではあったが、NHKの霞ヶ関スタジオで、木場連と共演したのであった。技術的には甚だ幼稚だったが、自前のおハヤシが出来たことと、テレビ出演をした事で、大いに自信をつける結果となった。この自信の裏付けがあつて、翌第七回ではいよいよ名称を「高円寺阿波踊り」と改めることになる。昭和三十八年の事である。

第七回大会には、忘れぬ思い出がある。二十七日の初日を無事終わり、二日目を迎えたのだが、昼間絶好の踊り日和とみえたものが、夕刻五時半頃から、猛烈な夕立に見舞われた。「バケツを逆さにした」という言葉があるが、そんなものでなかった。地球上の雨を全部集めたような痛烈な降りであ

った。当時、桃園川は暗渠になってなく、全くのドブ川であったから、ちょっとした雨にもすぐ出水したものである。この日のすさまじい降りには、遂に六時半頃に到って出水騒ぎに発展する。夕立がおさまるのを待って決行するか、或は中止にするか、それまで決めかねていた執行部も、もはやこれまでと中止を決定した。ところが、七時半頃に雨が上り、やがて出水も収まった。中止の指令が徹底していなかった事情もあって、踊り仕度の者が小人数乍ら街に現われた。その大部分は、中止と知って引揚げたけれども、最後まで頑張った人がいた。現在、葵新連々長をやっている森田昇栄氏である。その当時から森田氏は阿波踊りに大変熱心であった。五回目頃から、有力日刊紙に高円寺踊りの記事が掲載されて大いに宣伝に役立ったのだが、その根回しはたいてい森田氏の仕事であった。

そういう森田氏だったから、この夜の中止指令には、全く不満だった。この頃は雨天順延が認められていなかったから、この日の中止によって結果的にこの年は一日しかやれなかつた事になる。明日という日はないのだ、無念残念である。

「夕立だから、直きにやむのは判っているのに皆の意見も聞かずに中止を決めるなんて……」当時の実行委員長河原広氏に喰ってかかる森田氏は涙ぐんでさえたのである。

中止を決定した執行部の考えは、全く良識的だったと私は思う。何故なら出水騒ぎで床上、床下浸水多数を出している状況で、のんきに阿波踊り踊る訳にはいかず、又、警察からも中止か決行か速かに知らせと督促がくる状況の下では、中止指令は当然の事ではあった。だが、今になって思えば、たった二日しか許されない阿波踊り、その事に情熱を注いでいる者としては、泣くに泣けない事態で、そのやるかたないうつぶんを何かの形で表わさなければ収まらない気持ちには、よく理解できるのである。

高円寺阿波踊りの歴史は、このように、汗と涙でつくられた貴重な人間記録でもある。

四、規模のひろがり

第八回（昭和三十九年）大会は、記念すべき年である。この年から新高円寺通り商店街、（高南商盛会に隣接する南側、青梅街道に到る商店街）が参加することとなった。踊り路線は鎌倉街道（青梅街道より約一五〇米手前の十字路）まで延長される事になった。

元々、商盛会としては、この行事は一商店会のものとしていては将来性がない、高円寺中が、すべて踊りの渦になって始めて名物行事になりうるの考えに立って、「新高円寺」はもとより「北口銀座商店会」へも参加を呼びかけていたから、この年、「新高円寺」が参加に踏切った事は、大変によろこばしいことであった。記録によればこの年の参加連数は六連である。内訳は、商盛会二連、新高円寺二連、オール東京連（新聞広告等で同好者の参加を呼びかけた）それに木場連である。

この年には、テレビ出演が二回記録されている。12チャンネル「十二の関所」のビデオ撮りに杉並公会堂へ、更に「題名のない音楽会」ゴールデンポップスコンサートでは、黛敏郎指揮のオーケストラをバックに総勢約三十人が踊っている。踊りそのものはまだまだお粗末ではあったが、ようやく高円寺の阿波踊りがマスコミに認められ始めたという事で氣勢は大いにあがった。又、この年に始めて森田昇栄氏が徳島入りしている。徳島新聞社の好意で、競演場へ自由に立ち入る事が許され、本場有名連の踊りを刻明に8ミリに収め、その後の練習会に度々上映、技倆の向上に役立った。

次いで第九回（昭和四十年）には踊り路線が青梅街道まで拡大された。この頃になると警察当局も許可を出し渋る事もなく、むしろ好意的でさえあった。八回、九回と続けて路線延長が認められた理由の一つは、観客の著しい増加にある。狭い区域に大勢の観客が集中すれば当然事故につながる。路線を拡げ観衆を散らす事が事故予防になるのである。又、この年から雨天順延が一日だけ認められる事になった。

この年特筆さるべき出来事としては、十名の商盛会関係者が徳島を訪問した事であろう。私もこの時のメンバーであるが、今だに昨日の事のように覚えていてる。目的は見学であったが、その内、数名の者が大競演場で踊っている。私の記憶によれば、この時踊った顔振れは次の様である。川久保賢一君（現のびゆく連）富沢義夫君（現あすか連）小畑肇君（現あすか連）小長谷栄君（現実行委員）神藤信一君（現天狗連）他に一、二名いたように思うが

ハッキリとは覚えていない。この事は地元徳島新聞でも報せられ、恐らく高円寺の踊り手が、徳島の競演場に現われた、これが最初の事であろう。

続く十周年（昭和四十一年）には、記録によれば、何と十九連参加とある。人員約八百人、前年と較べて飛躍的なふえ方であった。十周年記念とあって、この年には、当時売出中だった、石田あゆみ、久保浩、という二人のタレントが来演、この写真が雑誌「明星」に掲載されている。

この年、始めての他商店街出演として、埼玉県飯能市へ行っている。バス差回りで男女合せて約四十名、この時の参加メンバーは、大変に豪華であった。トップは神藤君がつとめ、現在、実行委員会幹部、有力連の連長、副連長の地位にある人々が踊り子として、総動員されたのである。プロ野球の夢の球宴ではないが、メンバーだけは大変なものであった。こんな編成は今後恐らく組まれることはないだろう。

多分同じ年であったと思う。千葉県船橋商店街へ踊りに行った事がある。私の記憶の中で、中村和男氏（現天狗連長）が登場するのはこの時が初めてである。勿論、中村和男氏は、もっと前からおハヤシのメンバーとして活躍していた事は確実である。当時、商盛会関係のおハヤシチームは、三つぐらいに別れていて、中村氏と私とは別々のチームだったから共演する事はなかったのである。ところが船橋の場合は、中村氏のチームでカネを担当してい

た石川金作氏が不参加だった関係で、私がカネをたたきこの時始めて中村氏と共演したのである。なまはんかな名手というものは、とかく、自分がそのチームをリードしたがる。本来カネがリードすべきおハヤシを小だいが或は大だいが先行してしまっているのである。こういう場合のカネは大変たたきにくい、鳴物の中でカネほど、デリケートな神経を必要とするものはないと私は思うのだが、他の鳴物が先行した場合はカネはただのそえものにしか過ぎなくなる。呼吸（いき）が合わねばいい音が出せない、というのは、この辺の事情を物語るものだと思う。船橋の場合、私は大変たたきよかった。中村氏のタイコは、大変リズムカルで表情豊かである。タイコという楽器は、力いっぱいたたけば大きな音が出るし、逆に弱いたたき方をすれば必然的に迫力が失われる。中村氏のタイコは、強弱を適当に使って分け、絶妙のリズム感を生み出していた。それでいて決してリードすることがない、カネの緩急に適確に対応してゆく、これが本当の名手というものであると、その事を強く記憶している。

中村氏のタイコについて感服したのは、私だけではない。同じくカネで苦労した今枝滋且君も全く同様の感想を述べている。

× × × × ×

この第十回目を迎えた昭和四十一年は、ただ阿波踊り十周年というだけで

なく、もっと大きな意味で記念すべき年である。というのは戦后間もなく始つた高円寺駅周辺の区画整理事業が商店街関係の反対運動の為に中途半端な形で低迷していたのであるが、この年を契機に前進を始め、その後二年程の間に南口商店街の東側がビル化したのである。何故ここで区画整理の話を持ち出したかという点、阿波踊りと区画整理とは不可分の関係をもっているからである。区画整理の完了と共に駅前から青梅街道に到る巾員十八米の道路の一部が完成、これが三年後、踊りの主競演場として認められることになる。がこれは後日の事。ここでは区画整理推進の契機となつた火災の話を書いておこう。

八月の半ば頃の事である、その日が幾日だったか残念ながらはつきりした記憶がない。その日、高円寺の阿波踊りは、日本テレビのアフターヌーンシヨウ（生放送）出演の為、早朝から約五十名がテレビ局へ出掛けていた。夏の事だし、先方には広い着替え所の用意がないとの事だったので、全員ゆかた姿で迎えるバスに乗つたのである。アフターヌーンシヨウは、正午に始まり一時に終る。二、三度リハーサルがあつて、いよいよ本番開始、実はこの本番中に、不幸な事態が発生していたのであつた。火災の第一報は、留守居役の城石副理事長から局に十二時半頃入つている。しかし本番中の事で、踊り子達には何の知らせもなかつた。知らされたのは本番終了後、司会の桂小

金治が出演者の労をねぎらつている時である。とるものもとりあえずバスに乗り、一路高円寺へ、五丁目交番の辺りには非常線が張られていたが事情を話して通過、今の十八米道路とシルバード通りが交差する所で下車したのだが、附近一带には消防車が沢山駐つていて、ゆかた姿の私達としては、どうにもていさいの悪い事態であつた。私事に涉つて恐縮だが、火災は私のブロックであつた。何と私の店の一軒おいたところまで火が入つていたのである。隣りは水をかぶつて相当の被害が出た様子、幸い私のところはさしたる被害はなかつたものの超近火という事で、ゆかた姿で戻るのがどんなに恥かしかつたことか。

この時の体験で、私達は貴重な教訓を得た。災害はいつでも起るか判らない、いつどんな事態が起つても慌てないように、それ以来他所出演の場合には、必ず着替えを持参することになつた。

このようにいろいろな話題を残して十周年を送り翌昭和四十二年第十一回を迎える事となる。高円寺阿波踊り十八年の流れの中で、この年は正に画期的な年といつてよいだろう。いよいよ北口銀座商店会が参加したのである。従つて踊り場が北口迄拡大、文字通り高円寺阿波踊りは、全高円寺のものとなつたのである。元々北口商店会では、この行事に早くから参加の意志をもつていたのだが、当時は、国電中央線が平面を走つていた関係で、踏切があ

り、この為、南北の交流が不可能である事などの理由で参加が遅れていたのであった。あたかも南商店会の区画整理進捗とほぼ同じ頃、中央線の高架化が完成し、従って踏切も解消し、北と南は軒つづきの商店街になったのであった。ここに於いて北口商店会は勇躍この行事に参加した訳だが、この結果この年の参加連数二十五、踊り子総数千二百を数える事となる。北口の踊り指導は、小沢淳男、川久保賢一、神藤信一の諸氏が主としてこれに当たったと記憶している。

第一回「高円寺ばか踊り」が、一連三十名で始められたことを思えば全く隔世の感があるが、ここに到る道は決して平坦なものではない、毎年毎年少しづつ少しづつ積み重ねてきた努力が、汗と涙の年輪となって、たどりついた姿なのである。

規模の拡がりは、ここでとどまらない、第十三回、すなわち昭和四十四年には、南口駅前から、青梅街道に至る十八米巾の道路（区画整理によって出来た新しい道路）の一部、約二百五十米が踊り場として認められ、これが主競演場となるのである。つまり、現在踊り場として認められている全路線は、この年に確定したものである。

十八米道路といえば忘れてはならぬ人がある。小倉盛氏である。小倉氏は当時商盛会副理事長として各方面に活躍されていたので大方の方は御記憶の

事であろう。

小倉氏は、「十八米」が未だ整備されていない頃から「将来絶対にここを踊り場として確保すべきだ、これなくしては発展は望めない」と主張していたのである。当時は、車優先の時代だったから、新しく出来る広い道路はこれに全く自動車の為のものであると私達は思っていたから、小倉氏の主張は実現不能と思われた。その十八米道路競演場の夢が、実行委員会幹部の努力で、とうとう第十三回大会で実現したのである。不幸な事に、当の小倉氏は、記念すべきその年の十月二十二日約一年に渉る闘病生活を経て急逝されたのであった。

高円寺阿波踊りの基礎作りの功労者として氏の名前は永く記憶されなければならぬ。ついでに申上げれば、商盛会の直属のチビッ子連の名称「のびゆく連」は、氏の命名である。「のびゆく連」実によい名ではないか、高円寺の本番には、現在四十数連が参加しているが、これに勝る連名はちよっと見当たらない。「伸び行く」チビッ子達よ、ガンバレ！

扱て話を第十一回に戻そう。この年は、北口参加による規模の拡大の他に徳島葵連、小野正巳氏一行の来演、独立連の誕生等、特筆さるべき事柄が記録されているが、これ等については章を改めて記すことにしよう。

五、独立連の誕生

前章で述べたように第十一回大会は規模の一層の拡がりが見られた画期的な年であったが、この年は又、独立連の誕生、徳島葵連の来演等による技倆の飛躍的向上が約束された最初の年として高円寺阿波踊りの歴史の上で大変重要な意味をもつ。

「独立連」という呼び方は、これは恐らく高円寺独特のものであろうが、この意味は「既成の組織に管理されない、自主独立の連」ということである。無論、高円寺阿波踊りの本番に於ては、実行委員会の指揮下に入り、本部の指示に従って行動するのであるが、それ以外の平常時の行動は完全に自由であつて、何物にも束縛されることはない。

しかし自由であるからといって、何をしてもよいという訳ではない。高円寺の名を汚す如き行動は厳につしまねばならないし、郷土芸能としての阿波踊りの品位を傷つけることがあつてはならない。独立連のリーダーに見識が要求されるゆえんである。

独立というからには、経済的にも独立しているのであつて、それだからこ

そ、自由が認められているのだが、独立連の経営は、なかなか大変なものである。活動資金は、連幹部の拠金、連員の会費、他所出演の謝礼金、寄附金等の収入をもつてこれに当てることになるが、殆んど独立連は、連幹部が身銭を切つて経営しているといつてよい。

経済的な面からみれば、既成組織に依存している方が遙かに楽である。それなのに何故独立したのか、というところはこんな理由による。第一に、既成組織の中にある場合はすべての行動がその団体の予算によつて決められてしまふ事、第二に連の編成自体が上部団体の都合で決められてしまふ事、例えばA連B連があつたとする。上部団体の都合でC連を作ろうとすると、AとBから1-3づつの踊り手を抜き出してC連にまとめる。こんな事が、かつて行われたし、現在でもあるかもしれない。要するに現場の踊り子達の意志とは無関係のところ、連運営の大部分が決めてしまふのである。そのような状況の中では、いつの日にか自分達の思い通りの連を作りたいと思ふのは、自然の成り行きといふものである。

第十一回大会（昭和四十二年）に際して誕生した独立連は、「天狗連」と「葵新連」である。どちらが先に結成されたかはハッキリしない。確かな事は、この年の本番に「天狗連」「葵新連」といふ、前の年まで聞いた事のない連提灯が現われたということである。

天狗連は、それまでの商盛会直屬連「きらく連」の中の有志を集めて結成された。連長は、タイコの名手中村和男氏である。今から思えばお粗末なものではあったが、新しい衣裳を揃え、連員の意気大いにあがり、年毎に着実に伸びて行くのである。天狗連の成長の仕方は、高円寺阿波踊りのそれに似ている。小さく出発して、段階を踏みつつ次第に大きくなり、そして今日では名実共に高円寺のトップの座を占めるに到っている。

これと対照的な出発をしたのが「葵新連」である。早くから徳島との交流をめざしていた森田昇栄氏が、御自分の娘、真由美さんを中心にすえ、「オール東京連」（東京各地から集った踊り好きの人達の連）の一部を吸収して結成したのが葵新連である。森田氏は何回かの徳島行きの結果としてこの年小野正巳氏一行の来演を実現させた。彼自身の言葉を借りれば「葵新連の誕生を祝い意味で徳島葵連一行が来たのだ」そうである。葵新連は、やがて葵連東京支部となる。衣裳のデザインも本部のものを殆んどそのまま使用していた。だから、天狗連の発足と較べて、葵新連の発足は、大変に華々しいものであったが殆んど完成された形で出発しているせいも、その後の成長度は天狗連程きわだつていない感がある。しかし、今日の葵新連の行動力は目ざましいものがあり、他の追従を許さないのはさすがである。

その翌年つまり昭和四十三年には江間忠雄氏が率いる花菱連が結成されている。江間氏は小ダイコの名手で、その気つぶのよさにふさわしく男ばかりで編成した威勢のよいチームであった。ヤッコ踊りを得意とし、その後、連長が藤井朝信君に替った現在もその伝統は立派に引継がれている。

これに遅れる事三年、つまり第十五回大会（昭和四十六年）には、「あすか連」が誕生している。当時の「のびゆく連」の年長組を中心として結成されたローティーンの集まりであった。結成当時は大部分が小学生だったのが、四年後の今日では、中学生が主体となりこれに、小数の高校生、小学生が加わり、小供の踊りから、大人の踊りに脱皮、徐々に力をつけている将来楽しみな連である。世話人五名、連長は不肖私が勤めている。

以上の四連は、当時の高南商盛会（現高円寺南商店街振興組合）の管轄下にある独立連であるが、それでは他の団体の場合はどうかという点、厳密な意味での独立連は存在していない。技術的水準は、可成り高く、前述した四連と同程度、或はそれ以上の風格をもつ有力連はあるのだが、それらの連は所屬団体の全面的庇護を受けているらしい。かと云ってそれでは全く団体直営連かと云えば、経済的には直営でも、連員の意識は必ずしも直営されていないように見えるものもある。

メンバーは大体固定されているし、行動にも可成り自由を認められている連もあるようである。これら個々の連の実情について私は詳かにしないので、

ここでは便宜上「準独立連」という規範を設けて、それに該当すると思われるものをあげるに止める。新高円寺関係では、「新高連」と「菊水連」「北口」関係では、「江戸っ子連」「若駒連」「いろは連」それにシルバー通り商店会の「シルバー連」といったところであろうか。

いずれにしても独立連の出現は、その後の高円寺阿波踊りの振興に大きな力を発揮する事になる。何故ならば、自分達で金を出し、自分達でつくった連である。他の連に負けてはならない、よい意味でのライバル意識が生まれることによって技倆が、ますます向上してゆくからである。

尚、ここでちょっとふれておきたいのは独立連の意識についてである。独立連は前述したように、実行委員会という大きなワクの中には入っているけれども、それ以外のいかなる団体からも束縛される事はない。云いかえるならば独立連というものは、セクト的なものではないのである。発生の母体が〇〇会ではあっても結成された〇〇連はもはや〇〇会のものではないのである。独立連は高円寺以外の他所出演の機会が多い、そのような時〇〇連は〇〇会の為に踊るのではなく、高円寺踊りの代表として、高円寺の声価を高める為にこそ踊るのである。もし万一、独立連のリーダーにして、この意識を欠除する者あらば、それは高円寺に於ける独立連の資格を云々されても仕方のないことであろう。

六、徳島との交流

いうまでもなく阿波踊りは徳島が本場である。高円寺が昭和三十二年から阿波踊りを年中行事として採り入れた事情は、本稿の初めの部分に記した通りだが、正直な話、その頃には徳島という意識は殆んどなかったと云ってよい。その後本物の阿波踊り探しが始まって深川の鴨川さんと接した時、始めて私達は徳島の風にふれたのである。徳島の様子をうかがったり、毎年夏は郷里へ帰って踊ってくるんだという話を聞いて、私達は、未だ見ぬ徳島の本場踊りに胸を焦がしたものであった。

その阿波踊りのメッカ徳島の大競演場に高円寺の踊り子が現われたのは昭和四十年の事である。高円寺踊りが始まって九年目であった。土産物店で「どちらからお出ですか」と聞かれ、「東京の高円寺です」と答えると、「あゝ高円寺ですか、新聞で時々見ますが大分盛んだそうですね」大いに気をよくしたものであるが、この時の経験は、その後の高円寺阿波踊りの発展に大変に役立った。

その頃の高円寺は鴨川さんの指導によって多少阿波踊りらしい事が出来る

よくなっていったし、結構観客も集るようになっていたから、いうなれば自己満足の気味があつたのだが、徳島の大競演場で有名連の踊りを見てからというものの、何としても技倆の向上こそ最も大切な事であると肝に命じたのであつた。

それから二年を経て、天狗連、葵新連という独立連が誕生、これが一層の技倆の向上をうながすことになる。

特に徳島葵連小野正巳氏一行の来演は、その後の高円寺踊りに大きな影響を及ぼした。神戸銀行高円寺支店三階ホールで葵連による勉強会を行ったのだが、この時が徳島の本場踊りに接した最初の機会であつた。小野氏と云えば「のんき」の勢億氏と共にTVその他を通じて、阿波踊りのトップスターとしての認識があつたから、その小野氏自身が指導する勉強会は、なかなかの人氣で、この時に本物の阿波踊りを身につけた人も多いはずである。現花菱連長の藤井君もその一人である。

しかし、この勉強会は思わぬ副産物をも生みだした。小野氏の踊りを阿波踊りの最高のものと思ひ込み、まねをする者が続出したのである。小野氏の踊りは、あれは自らの体駆に合せて編み出した小野氏独特のもので、いかなれば小野踊りとも申すべく、正調阿波踊り、そのものではないのだが当時の高円寺の踊り子の多くは、そんな事とは露しらず手を胸先にチョコンと出

して、手首だけで踊る小さな踊りをまねて得意顔していたものである。さすがに、二、三年の内に、小野ブームも過ぎ去つて大部分の者が正調踊りを志すことになるが、この小野踊りの流行は、無論小野氏自身予期しないものであつたろうが、本場の有名な踊り手のする事ならば何でも吸収すべしという当時の高円寺の踊り手が、どん欲なまでの熱意を持っていた事を物語る。

高円寺の葵新連は前章で述べたように結成当初から葵連東京支部を名乗つた。葵連のカサの下に入れば技倆導入が容易であり、更に徳島でもトップクラスの力をもつ大きな連と組むことによつて、自らの連の格も上がり、いろいろなチャンスにも恵まれよう。森田連長一流の見透しのよさが適中したようである。昨今、毎年行われている椿山荘阿波踊りの葵連受持ち期間中、連日葵新連から数名が応援に行っている事は、今や周知の事実であるし、徳島での本番にも何人かのメンバーが葵連の中で踊っているはずである。更に天恵連とも組む事によつて、葵、天恵、葵新、この三連がギブアンドテイクの関係を持つ事になる。この事の是非はともかく、こうした状況を見ると、本場の踊り手の中に入つても、いささかもひけをとらない力を、高円寺の踊り手が身につけた証左といつてよいかも知れない。

一方、天狗連は、これも徳島の有力連である「平和連」と姉妹連の関係を持つ。

昭和四十六年八月初旬には平和連一行が来演、天狗連と合同連を組んで高円寺の街を踊っている。更にその年を第一回目とし、四十八年には二回目の徳島行を実現した。五十名に近いメンバーを引き連れて徳島へ繰り込み、天狗連の名に於て平和連と共に踊っている。「葵新」も「天狗」も徳島の有力連と組むことよって、着実に力をつけて来たのであるが、同じ手を組むといっても、この両者の行き方には、少々違いがある。一方は、完全にカサの下に入ることによって有利な条件を作り出そうとしているのに対して、一方は常に自主制を貫こうとしているように見える。この辺の事情について論評する声を聞くことがある。しかしこれは連長の考え方と連の編成上の問題から必然的に或は偶然的に出て来た結果であって、第三者が軽々しく口出しすべきことではないだろう。

さて、高円寺に於ける二大勢力は、このような形で徳島と交流をつづけているのだが、他の後発諸連の活動はどうかと云えば、先づ北口の「江戸っ子連」の場合、昭和四十七年に約二十名のメンバーで徳島へ繰り込み、大競演場で踊っている。高円寺を代表するに足る立派な踊り振りであったという。「花菱連」は、徳島の浮助連と関係をもち、毎年何人かの連員が踊りに行っていると聞く。

更に昭和四十八年には「あすか連」が、年来の宿願であった「娯茶平」と友好関係を樹立し、同連の後援を得て本場の技術吸収を計っている。同年十月には、合羽橋で、娯茶平のメンバー二名が参加、初めての合同編成が実現している。

以上は連を中心とした交流であるが、高円寺全体としての状況を見ると、昭和四十六年には、徳島県知事から、高円寺阿波踊り実行委員会宛に感謝状が贈られ、更に四十七年には立派な優勝旗が、徳島市長から贈呈されるなど、大きな場での交流も盛んである。因に、この優勝旗は、高円寺の大会で、その年度最優秀と認められた連に授与される事になっている。四十七年度は、「天狗連」が、四十八年度は「あすか連」が受賞しているが、さて四十九年度は、この連がこの大優勝旗を手にするようになるのであろうか。

徳島との交流は、踊りそのものは勿論として、物産等についても行われた。徳島県東京事務所から徳島特産品を搬入し、高円寺踊りの当日、即売会をやったことがある。売上げはさしたる事はなかったが、ムード盛り上げには役立ったように思う。

徳島出身の正木画伯の阿波踊りをテーマとした絵画展が催された事もあった。

踊りにつかういろいろな物品、鳴物等はすべて徳島から購入しているし、昭和四十七年には、国鉄高円寺駅が主催して徳島観光団を組織、約五百名が

参加している。高円寺は徳島の観光事業に一役買っていると云ってもよいかも知れない。更に、高円寺阿波踊りが、もつともつと拡大した場合、特別区としての杉並区（市と同格）が徳島市と、姉妹都市の関係をもつこともあながち夢と云えないだろうし、是非そうなって欲しいと私は考える。

七、他商店街との交流

つい最近、高南振組の幹部が所用あって警視庁交通部を訪問した時の事である。談たまたま阿波踊りに及び、交通部長が管内のいろいろな行事の一覧表を見せてくれた際、阿波踊りの項に、何と十六ヶ所が記録されているのを確認した。高円寺を別として、その内、私共が知っているのは次の通りである。下北沢、目黒、金町、十条、関町、亀戸、三鷹、初台、狗江、高井戸、板橋、神楽坂、大塚、あと二ヶ所は失念したが、これは年中行事としているところだけで、その年だけのところとか、普通の盆踊りの中で阿波踊りを採り入れているような場所を含めたら、優に二十を越すと思われる。前記の内何らかの形で高円寺が関係しているのは、高井戸、板橋を除いた全部と聞いていい、それらの商店街での阿波踊りの歴史は、古いところでも六、七年、平均三、四年といたところだから、十八年の歴史をもつ高円寺とは規模も技術も差があるのは、当たり前である。だからそれ等の街の本番には、応援を要請される事が多い。指導を頼まれる場合もある。会場設営や、運営について相談を持ち込まれる事もある。高円寺はそれ等の要請に可能な限り応

えることにしている。他の街に対する高円寺のそのような応援に対して、返礼の意味もあって、高円寺の本番には他商店街からの参加が多い。結果的に東京各地の連が一堂に会する事になって、事実上の東京大会の観を呈するのである。

私達高円寺が徳島を阿波踊りのメッカと心得、一連を率いて徳島の大競演場で踊ることを夢みるとするならば、その他の商店街は、高円寺を、東京阿波踊りのメッカとして、十八米競演場で踊る事を誇りに思うのかも知れない。

他所の土地で踊るのは大変に勉強になる事である。私達の場合でいえば、いやしくも高円寺を代表して行くのだから、絶対に上手くなければならぬ。たとえ、その連の歴史が浅くとも、踊り手の年令が低くても、高円寺の連は常に十八年の歴史を背負って踊るのだから、マナーも充分心得て、いついかなる時も真面目に踊る事、つまり模範的でなければならぬという義務をもっている。それが勉強になるのであるし、逆に高円寺へ集る他所の連の場合、東京中から集る他の連に対し少しでもぬきんでようとする意欲、これが技倆の向上につながるのである。現に高円寺で踊る為に特訓をして来るところもあると聞く。

東京での阿波踊りは、早いところが七月下旬、遅いところで九月上旬、大多数は、八月に行われる。それも土曜日曜に集中するから、同じ日に二、

三ヶ所で行われる事がある。そんな時、高円寺は本当に困ってしまふ。どの商店街にも多少の義理があるから、請われれば行かねばならないと思ふ。連同士で相談し、何とか都合をつけて可能な限り行くようにするのだが、不義理をする場合もある。何しろ高円寺の場合、前述したように交流する街が十ヶ所位あるのだから止むを得ないことなのだ。

数年前、高円寺が音頭をとって「東京都商店街阿波踊り振興会」なる組織がつくられた。阿波踊りを年中行事とする商店会に呼びかけ約十の街がこれに加盟した。各街の親睦、情報の交換、技術の向上、相互援助を目的とした会であった。この創立総会で各商店街同士の連の交換は、パーティー制でゆく事が決められ、約二年程、この方式が実行されたのだが、皮肉な事に真先に、悲鳴をあげたのは、他ならぬ高円寺である。連のパーティー制というのは、例えば高円寺がA商店街へ一連派遣したとする。A商店街は、高円寺大会の際に同じく一連派遣する。派遣に要する費用は派遣した商店街の自己負担とするというものである。一見、合理的に見えるこの制度が実は、高円寺にとって大きな負担となってしまうのである。何故なら、A商店街は高円寺へ派遣する自己一連の経費を負担すれば事足りる。ところが、高円寺は、AにもBにもCにも更にD商店街へも派遣しなければならぬ。そのすべてを自己負担していたのでは、何の事はない、高円寺の金で他商店街を賑わしている

結果となつてしまりののである。高円寺としてはこんな不合理な話はない。更に派遣される各連の事情もさまざまである。サラリーマン中心の連は、土、日は比較的出やすいが、商人中心の連は、大変に出にくいのである。このような事情を踏まえ、昭和四十八年度からは需要供給の原則にのっとり、経費は、相手方の負担とする方式に切り変える事になる。ただ、この方式変更について、正式な振興会の総会を開かず、いりなれば高円寺の独断専行の形で行われたので、他商店街には迷惑をお掛けしたと思う。総会を開かなかつた事については、いろいろ事情があつたのだが、弁解がましくなるのでここでは卒直にお詫びする事で、御諒解願いたいと思う。更に四十八年度に於いて連を交換した街は、よく御承知と思うが、高円寺から派遣した連の経費の御負担額と、高円寺へ来た連に対する高円寺の負担額は、可成りへだたりがある。この事について御不満をお持ちの街もあると思うので一言つけ加えておきたい。私達が、徳島から本場の連を呼ぶ場合、交通費、宿泊費、謝礼等すべて私達が負担する。お客様としてお迎えして帰ってもらうのだから、これは当然の事である。逆に私達が徳島へ行く場合どうだろう。すべて私達の自己負担である。何故なら、私達は勉強に行くのだし、私達が行こうと行くまいと先方はいささかも痛痒を感じないのだから。つまり、これが需要供給の関係ということであつて、高円寺と他の街との関係はこれに似ている。

ひとくちに交流といつても、連を交換し合う場合と高円寺から行くだけのいわゆる一方通行の場合とがある。私達は、この二つを厳格に区別して考えている。後者の場合は純然たる出演の形になるから、実費に多少の出演料を加味した数字をいただく事にしている。この出演料は、たいていの連は蓄積し、備品の購入や、連の維持費に当てているようである。

出演の話が出たのでついでに記しておく、「天狗」「葵新」辺りは、技術的にも高度なものを持っており、連員の動員力もある為に、ホテル、遊園地、ピヤホール、等にも招かれて出演する事が多いようである。

八、発展につぐ発展

今迄、述べて来たように、高円寺の阿波踊りは、本場徳島との交流によって急速に腕をあげ、更に東京各所の大会に参加する事によって明らかに「見せる連」を標榜すると思われるものが現われて来る事になる。

何でもそうであろうが、阿波踊りの場合も「参加することに意義」「楽しむ」「見せる」の三つのグループがあつて、これは連及びその所属メンバーが成長する為の必要な段階と云えるかも知れない。私事に涉つて恐縮だが、私の場合でいえば、始めの数年間は、横井さんではないが「恥かしながら」踊つたのであつて、皆がやるから、仕方なくやる「参加する事に意義」を見出し始めていたのだが、その後、鳴物に転向してからは、新たな可能性を極めたいと一心不乱にカネをたたく続けた。今思えば、この時期が、一番楽しい時代だったように思う。踊りの上手、下手や、他の連の状況などは二の次、踊りやすいように、他の鳴物がついてきやすいように、ただ、それだけを思つてシュモクを握つていたのであつた。今日「あすか」と云う独立連を率いる私は、さまざまな場で苦しく、又きびしい立場におかれる。楽しいなんてもの

ではない。何としても自分の連を一級品にしたい。どこへ行つても賞讃される連にしたい、つまり「見せる連」として完成されねばならないと思う。これは恐らく他の連の指導者皆に、あてはまることだと思ひのだが、この様な個人としての成長段階は連というグループの場合にもそっくり当てはまる。大別して「参加する事に意義を見出し出している連」は、銀行等の金融機関、各種事業所の連、一部の町内会連がこれに当たるし、「楽しむ連」としては踊り手募集の看板をみて集つた踊り好きの連中、町内会、或は民謡グループの連等がこれに当てはまろう。「見せる連」を目指すのは、前述した独立連、準独立連と思えばよい。

高円寺の阿波踊りは、これら三つのグループが仲良く、参加する事によって大変にヴァラエティに富んだものになっている。

銀行等の企業連は、昭和四十三年頃から次第に増え始め、現在では、高円寺のすべての金融機関、生命保険会社、不動産会社、電々公社、自動車の販売会社等々、約二十が参加、これに町内会、各種団体連、独立、準独立連、他所からの連が加わつて、総連数四十五を数えるのであるが、一連平均五十名としても約、二千五百名が踊ることになる。更に観客は、二日間の本番に計五十萬（警察調べ）と云われる大行事となつたのである。本場徳島では、数百の連が繰り出すと云うから、比較にはならないが、恐らく、徳島以外で

行われる阿波踊りとしては、高円寺が最大のものと云ってよいだろう。

十八米道路競演場の出発点に立つと、ゆるい上り坂の為、競演場を埋めつくしている観客と踊り子の渦がかすかに望まれるのだが、これを見る度に、私は胸の熱くなるような感懐を禁じ得ない。初回、たった三十人で始めたこの行事が、いつどうしてこんな大行事になったのか、常に渦中であって歴史を知りつくしているつもり私だが、ふと夢見ているような思いがするのである。

扱て話を戻そう、「参加する事に意義を見出している連」「楽しむ連」「見せる連」の三つがあると前に書いた。

例えばこうである。商店街通りでは混雑激しく、遅々として進行しないことが多いが、そんな時、腰をおろして一服している者がいる。腕組みしながら、後の連の踊りを見物しているものもいる。そうかと思うと「阿波踊り」か「おけさ」か判らぬ手振りで、それでも一所懸命やっているおばさん達、整然と体型を組み、元氣な掛声かけて踊る連、三者三様の踊り絵図を描きながら、そして皆、結構楽しんでるのである。阿波踊りはそれでよいのだと思う。皆がみんな、整然とした立派な踊りをやっていたのでは、クラシックの演奏会さながらに、見る方もかしまっていなければならぬ。少々、ズッコケた連もあるから見る人の笑いを誘い、近親感も湧くのであろう。阿波踊

は郷土芸能であり、盆踊りの一つであるから「同じ阿呆なら踊らにヤソソソソ」のはやしことばの通り見る人も思わず手を振り足を踏み、いっしょに踊りたくなるような雰囲気を作る事が大切である。かと云ってズッコケ連ばかりでは困る。これが本場の阿波踊りというものもなければならぬ。これが「見せる連」の役目であらうか。

因みに26日の前夜祭には、「見せる連」ばかり約十連が、午後五時から八時まで商店街通りを踊る事になっている。この時は連数が少い為各連共、持てる技倆を充分に発揮して見ごたえある演技を繰り展げる。

かくして高円寺の阿波踊りは、ますます発展の一路をたどるのである。

九、舞台をつくる人々

今迄、書いて来たのは主として踊りの現場に焦点を合せた高円寺阿波踊りの歴史であるが、踊り子達が気持ちよく踊る為の会場作りには精出す人々の努力を忘れてはならない。

むしろ本当の功労者はこの人々であると云っても過言ではない。会場となるすべての街路の照明、装飾、宣伝、警備関係者の受入準備、弁当の手配から飲物の配給、水呑所の設定、観客席の設営等々、これらのすべてを高円寺阿波踊り実行委員会の幹部が手分けをしながら、着実にすすめるのである。しかも総経費二千万円（四十八年度）といわれるこの行事を、最低の経費であげるために、スポンサーを募ったり、寄附金を集めたり、それはもう大変な労苦なのである。三、四年前から産経広告社が介入、主として車内吊ボスター、新聞広告等宣伝の一部業務を担当しているけれども、実行委員会の業務が特に軽減された訳ではない。

現在、実行委員会を形づくっているのは、高円寺南商店街振興組合、新高円寺通り商店街振興組合、高円寺銀座商店街協同組合、氷川町会の四団体であ

って、この内三つの商店街の場合は、それぞれ自己所属の踊り連をもつていて、又、宣伝にも役立つ行事だから、従って労苦は当然の事とは云えるけれども、氷川町会の場合は、事情は一寸異なる。氷川町会は直属連を持っていないし、自治会という性質上、人が沢山集ったところで会としての直接的利得はなにもない。にもかかわらず実行委員会に名を連らね、いろいろな業務を分担しているのは、その管轄内に十八米道路競演場があるからである。十八米競演場の設営の殆んどすべてを氷川町会が受持っているから、当日は大変である。踊り開始時間直前までこの道路は自動車走っているから、通行止と同時に青年部員が総出動、約三百米の両側に座り席を作る作業を始める。席が出来るのと踊り開始がほとんど同時という忙しい仕事をやるのである。本番中は、提灯を持って、所要所の警備に立ち、更に九時三十分の終了時間と共に、座り席を撤去、手早く清掃を済ませ通行再開に備える作業をするのである。全くの話、縁の下の力持ちを担当しているのであって、これは容易な事ではない。私共、踊りの現場にある者としては、感謝の念をこめて、この競演場を踊らなければ相済むまいと考える。

各連の運行コースは、実行委員会が決定する。全コースを回る、いわゆる大回りの連、中回りの連、小回りの連、連の性格、所属等を勘案して公正に決めているのである。

二十七日と二十八日のコースを変え、どの連も、二日間で殆んど全部のコースを巡回するように組むのであって、このコースを勝手に変える事は絶対に許されない。連長には、コースを明示した通行証を持つ義務があり、必要に応じて、これを提示する事になっている。

何故、コースの指定をするかという点、これは踊り路線の全域に常に連が在るようにする配慮からである。以上書いた以外にも、実行委員会の仕事は、山程あって、そのすべてを書く訳にいかない。

派手を踊り連を盛り立てる為に黙々と仕事をする実行委員会の人々、その方々の努力あつての繁栄である。本来なら、その方々すべてのお名前を連記して謝意を表すべきであろうが、ここでは最高幹部だけを紹介するに止め、心からなる感謝の念を奉げたい。

総括委員長 小沢淳男、各構成団体委員長 塚本忠吉、草柳勝治、斉藤信雄、城石昇の諸氏である。

十、高円寺阿波踊りのルール

以上九章に涉つて高円寺阿波踊りの歴史と、それにまつわるいろいろな事柄について記して来たが、読み返してみると、ホンの表面だけをなぞってきたように思う。十八年の発展の中で、もみくちゃにされ、或る時は喜びを、或る時は悲しみを体験してきた人々の哀歓を刻明に書いてみたいと思つた初めの意図は、果たす事が出来ず、特急列車の如く、小さな出来事等は通過して終点に向つていようである。しかし、精読して貰うならば、高円寺の阿波踊りが段階を踏み乍ら少しづつ少しづつ成長してゆく様子が御理解願えた筈である。その発展の過程の中で、幾つかのルールが確立され、参加各連がその原則を守る事が、モラルを向上させ、十八年間、これといった事故もなく一途に発展して来た大きな理由となっているのである。

“原則として飛入りを認めない”

“酒気を帯びて踊ってはいけない”

“企業連の宣伝行為は、一定のワクを越えてはならない”

“政治、宗教の宣伝に利用してはならない”

幾つかあるルールの中でこの四つは、絶対に守らねばならない鉄則である。
① 飛入りを認めない事について

阿波踊りは楽しい踊りである。はやしことばにもある通り「踊る阿呆に見る阿呆、同じ阿呆なら踊りにヤンソンン」

見ている者も、つい手を振り足を踏み、飛入りしたくなるというものだ。その飛入りを認めないというのは少々話がおかしいとは思ふ。しかし止むを得ない事情があるのだ。その最大のものは、飛入りする人がエチケットを知らない場合が多いからである。きちんと列を作り整然と踊り進んでいる先頭に飛び込む、女踊りの中に入って踊り子をからかったりする手合いもいる。これでは、この日の為に訓練をつんだ者としては認める訳にいかぬ、最後部について楽しく踊ってくれるのなら、御愛嬌であるが、一人か二人の心ない人の為に連の統制がみだれるのは絶対に困るのである。更に、この行事にケチをつける目的で飛入りをよそおって無法者が混入するおそれもある。だから、私達は、飛入りを見つけると、最後部へ行くようにお願いし、聞き入れない場合は止むを得ず排除する、ただし踊りたい人は沢山いる訳だから、本番一ヶ月程前から踊り手募集を行い、当日の飛入りが極力少くなるようにしているのである。この小文をお読みになつていて今年には是非踊りたいと思ひ方は、事前に実行委員会事務局へ申込まれたいと願つておく。

② 酒気厳禁について

この件は、実行委員会が最もきびしく規制している。初めて踊る人は「一杯ひっかけなきやあ」と思うだろうし、楽しい踊りなのだから、多少の事はいいだろうと思ひ勝ちである。

しかし「酒帯び踊り」は、いろいろと不都合な場面を引越す。高円寺の本番は、各連それぞれ所定のコースを回るのだが、出発点から休憩地点迄の各行程は、三十分を越える。アルコールが入つていては息切れがして踊り切れるものではない。自然、踊つたり歩いたり、だらしない事になつてしまふ。見物人とのトラブル、他の連とのトラブルが起る心配もある。とにかく本番中は、皆、一種の興奮状態にあるのだから、ちよつとした事が争ひのタネになる。

無事盛大に本番を行う事が、最大の眼目である以上、酒気厳禁は当然の規制といつてよいだろう。因に高円寺の連が他所へ行った場合にも酒の接待は遠慮する事になつてゐる。

③ ④ 宣伝的行為は慎む事について

現在、高円寺では相当数の企業と少数の宗教団体が参加しているが、これ等について無制限の宣伝活動を認めたら、さながら仮装行列の如き様相を呈することに成るかも知れない。阿波踊りに参加する事は、踊ることが目的で

あつて宣伝に利用しようと思つてゐる事は、それ自体間違つた考え方である。しかし、企業連としては多少の宣伝をしたいと思つるのは当然の事でもあるので、連名に企業の名を使う事、名入りの衣裳、うちわを使用する事及び、一定規格のプラスチックカードを持つ事が認められている。

更に掛声に企業宣伝を折込む事も自由である。例えば「預金は、〇〇、〇〇は親切だ：」の銀行連、「踊りは、〇〇〇、車は〇〇〇」の自動車販売会社等々である。企業連の場合はこのような一定のワクの中での宣伝は認められているけれども、宗教或は政治にかかわりある団体の場合は一切の宣伝的行為は認められていない。現在は、二つの宗教団体が参加しているが、宗教名を連名にする事も許されていない。将来政治的団体が参加する事があるかも知れないが、同じ取扱いとなるだろう。宗教、政治に一切宣伝を認めないというのは、ひとつには、特定のものを打出す事によつて、見物人に不快を与える事があつてはならないし、特に政治の場合には、どんな不測の事態を招くか判らないからである。

以上、高円寺阿波踊りのルールの幾つかを紹介したのだが、このルールを定めた目的は、一にかかつて、この行事を無事平おんに行い、観客も踊り子も楽しいひとときを過ごしたいと願うからである。もうひとつ付け加えよう。

踊り子は、手、足、顔以外の素肌を露出してはならないこと。毎年、一、二名見掛けるが、これは絶対に祭物である。踊りに熱中する余り、暑さも手伝つてか、ゆかたの上半身をぬいで踊っている者がいる。大変に見苦しい。いくら暑くても、涼しげな、楽しい表情で踊るのが、阿波踊りである。郷土芸能としての阿波踊りの品をおとす、このような手合いは、高円寺で踊る資格がないといつても云い過ぎではあるまい。

扱て、こうして技術的にも規模の上でも、一層の発展が約束された時、次に考えなければならぬのは観客の為の施設であろう。頭初、この行事は、年一回のお客様へのサービスと考えていたのだが、十八年にたった今日では事情一変して、今や高円寺の阿波踊りは、単なるサービス行事ではなく、観光事業として立派に成り立つべき力をもっていると考えられる。徳島市を考えてみよう。徳島市から、阿波踊りをとつたら、何が残るだろうか、温泉がある訳でなし、特別な名所旧跡があるでもない。十郎兵衛屋敷と、写楽の墓だけの一地方都市にしか過ぎまい。だが、阿波踊りがあるから、そしてそれをフルに活用する事によって徳島市は観光地のひとつとして数えられているのである。この先例にならって高円寺も、もつと阿波踊りの活用を考える必要がありはしないか、そろそろその時期が来ているように思うのである。

例えば「はとバス」の納涼コースに加えてもらう事にしよう。

東北等、四国迄は遠すぎる人々を誘致するのも面白い。その為には受入れ態勢を整える必要があるだろう。十八米競演場の両側に、徳島並のマンモスサジキを作ろうか。無論、ここは有料である。観光会社とタイアップして、貸切り席を設け、積極的に地方客を誘致したいものである。その他のサジキは、各商店等に、買ってもらって、お得意様招待に利用して貰う。更に昼間でも見られるように、高円寺会館或は、近くの映画館を利用して、有料のス

テージ踊りをやる事にしたら、どうだろう。これは踊り期間中に限らない。五月から九月頃まで、毎月一回でよい、日曜日の午後、常打ち興行を試みるのも面白かり。この入場券を商店街のサービスとして利用してもらう事によって、観客も或る程度確保出来そうである。

実は、この様な発想、私の創作ではない。現に徳島では、このような形態が実行されているし、常灯興行云々については、神楽坂商店街の場合を参考にしてみた。神楽坂では、商店街の中に毘沙門天があり、そのこじんまりした集會場で確か毎月五日の日だったと記憶するが、寄席をやっている、これがなかなかの人気のようである。この寄席は三遊亭金馬の一門が出演しているのだが、我が街の場合、阿波踊りという誇るべき財産があるのだから、これをフルに活用する事によって、いろいろなプラスがもたらされるように思う。

これらの事業を商店街関係者のみで行うのは無理があるように思うので、この仕事は、以前から話がある仮称「東京阿波踊り協会」を早急に設置して両者協力の上実施を計るのが良策と思うが如何なものであろうか。

以上、夢物語のような未来図を描いたのだが、これは計画次第で、実現可能な夢であると思う。

十二、阿波踊り雑感

この小冊子の表題は「あわおどり——高円寺の十八年」である。前章迄でひととおりの事はお判かりと思うのだが、書きもらした事も多いように思われる。だが私の貧弱な記憶力と、つたない表現力ではこの程度がせいじつぱい。御勘弁願う他はない。と云う訳で本稿もそろそろ終りにしてもよいのだが、未だ若干、予定した紙数に余りがあるので、この十八年間の体験と、見たり聞いたりした事をつきまぜてもう少し書かせて貰う事にする。蛇足に近いものだが、御参考になれば幸せである。

〃 阿波踊り考〃

その起源について、「天正十五年（一五八七年）蜂須賀侯が徳島城を築いた時、その落成祝いに城下民が踊り狂った」というのが通説であり、その故に底抜けに明るく陽気で、一名「気ちがい踊り」とも云われているが、考えてみると、これはちよつと変である。いかに無礼講であつても、踊りのパターンが、一夜にして出来るはずがない、踊るとすれば、やはりいつも踊って

いる踊りを踊るのが自然である。この辺の考証について、郷土史家の福井好行氏の著書（山川出版社刊・徳島県の歴史）によれば、「福長玄清の『三好記』には、天正六年七月十六日にさかんな盆踊りが勝瑞城下でおこなわれたと記されているから、その起源は天正以前にあり、街中を静かに流して謡い歩いた盆の精霊踊りを、その起源とするのが正しい」とするのがやはり妥当なところであろう。阿波踊りという名称は、昭和初期に定められたもので、それまでは、単に盆踊りと称し、現在でも地元の人は大低盆踊りと云っているのを見て、その辺の事情は明かである。ところが盆踊りとは何かと云えば、云うまでもなく、精霊を迎え、慰める踊りの事であつて、従つて底抜けに明るく陽気であつてよいはずがない。無論現代に於ける盆踊りは、多分にレクリエーションの要素が加わり、楽しむ踊りに変質しているから、その起源が精霊踊りだからといって変に陰気になる必要はないだろう。

しかし大切な事は、その起源が精霊踊りだという認識であり、そこに自ら踊り自体の限界を知ることであろう。福井氏の著述によれば「最初は所々の庭や、軒下で踊る輪踊りであつたのが、しだいに仮装を主とした「組踊り」や「走り俄（にわか）」に変わり、踊り場での競演となり、年々趣向をかえて、人目を驚かそうとして華美に流れたため、宝暦六年（一七五六）には、おふれが出て、「盆の三日間は従来通り御法度をまもつて踊つてよろしい、

しかし御祭制の組踊り、あるいは子供たちが華美ないでたちで組踊りをするのは、不埒（ふらち）である。通例の通り神妙に踊るよう”きつと申しつけられた”とある。その後もたびたび禁令が出されたという事実にも鑑みても、この踊りが、とかく華美に流れやすく、その傾向を、時の為政者が、権力をもつていましめて来た様子がうかがわれる。

幸な事に、現代では”踊り”を権力をもつて規制するものはいない。何をすることも勝手である。だが、阿波踊りが本来、精霊踊りである事を認識し、その本質が「陰（いん）」である事を知る時、自ら限界を持たなくてはならないと思うのである。そしてそれこそが、郷土芸能を愛する真の道であるとも考えるが如何なものであろうか。

私 の 理 想 連

阿波踊りは、云うまでもなく徳島県の郷土芸能である。郷土芸能であるからには、野趣と素朴な味わいが感じられるものでありたい。

今日の阿波踊りは、多分にショウ化して、スマートな演出と、凝った衣裳で観衆を魅了しようとする。それはそれでよい、しかし心せねばならぬ事は”見せる”意識が先行しすぎてはいけないという事だ。この意識が先走ると観客との距離がはなれ、違和感を与える場合さえある。阿波踊りは盆踊りで

あり、民衆の中に生まれ、民衆の中で育った芸能である。だから、余りにも完成されすぎたものには民衆は一体感を持たないのだ。未完成のもの、少々ズッコケ気味のものの方により多くの共感を感じる場合があるのではなからうか。勿論踊りは上手くなければいけないが、必要以上の華美ないでたち、計算されつくした演出、よりも、素朴でさわやかな味わいの方がより大切だと私は思う。

それが私の理想連である。

阿波踊りに賭ける

阿波踊りは不思議な魔力をもっている。ひとたび、これに魅せられるとやめられなくなる。やめるどころか、だんだん深みにはまり込んでしまう。二拍子のリズムミカルな音色がひとりりで体の躍動を誘い、無我の境に達する。その意味では、阿波踊りは、”踊る宗教”に似ている。踊り子達はリズムにのり暑さも忘れてただひたすら踊り続ける。私はそこに、生きて在る生命の燃焼を見る。

現在、各有力連の幹部をつとめておられる方々は、阿波踊りの魔力にとりつかれた最たるものである。自分だけではあきたらず、同好の士を大勢集めて連を作り、少しでも他に抜きこんでたものにしてほしい、自分の描く理想の連

に仕立て上げたいと、心をくだくのである。これは又、自己の本業以外の次元での可能性の探求といってもよいかも知れない。

「たかが阿波踊り」と云ってしまえばそれまでである。しかし「たかが阿波踊り」の為に生命を賭ける事を笑ってはいけぬ。生命を賭けると云っても、それは、切った、はったの生命ではない。生きて在る確証を得る、その為に情熱を賭けるといふ意味である。

現代という時代は、サラリーマンといわず、商人といわず、巨大社会の中の一齒車にしか過ぎない。齒車とは云え、私達は人間である。どこかの場で、人間としての存在を主張したいと願うのは自然の理であろう。

或る者は、酒を愛することに生甲斐を感じ、又或る者は、女性にそれを見出す。

私共、一連を率いる立場にある者は、阿波踊りにそれを見る。だから、有力連の幹部には、意外に真面目人間が多い。

連長稼業

連長という職務は、なかなか骨の折れるものである。踊り好きという共通点があつても種々雑多な考え方もついている数十名の連員を、ひとつにまとめ、自分の理想とする連カラーを作り出さねばならない。異なつた意見も出

る。それらを調整しつつ、出来るだけ自分の考えを浸透させ、試行錯誤を重ねながら、カラーを確立させてゆくのである。私の場合でいえば、これが我が連のカラーであるべきと確信をもつのに三年余を要した。これからは、その確信を具現する為に努力してゆく事になる。

ところで連カラーとは何かと云えば、それは、見る者に与える印象と感動とでも云えばよいかも知れない。引き合いに出して恐縮だが、男ばかりで編成している花菱連の場合、「男っばい、きつぶのよさ」がそれに当らうし、常に先端を行く天狗連には「華麗なる力」を感じる。

ならば私の主宰する「あすか」の連カラーは、何かといえは、「素朴で、さわやか」な印象を与えるものでありたい。ホームラン続出のプロ野球の豪華さでなく、基本を忠実に守り、一点一点を着実にとってゆく、真剣味溢れた高校野球のムードである。だが、残念な事に私のその様な考え方は、完全に連員ひとりひとりに浸透してはいない。だから、本番中に、だらけた態度をとる者もあるし、気を抜く者もいる。そういう者を見つけるとイライラしてしまふ。合図を送る。にらみつける。それでも判らぬ者には、容赦なく怒鳴りつける。普段、人一倍おとなしい私が、本番中は人が変ると人に云われる。当り前である。練習を積み、他所出演で自信をつけさせるのは何故なのか、すべて高円寺の本番で、最大限の力を発揮する為のものではないか。



一年間の積重ねが、高円寺の三日間で試されるのだ。連長たるもの瞬時も気を抜く事が出来ない。きびしく苦しい三日間である。

それだけに上位入賞を果した時は、本当にホッとすること。これだけ締めあげて、もし入賞出来なかつたら、連員に合せる顔がない。

表彰式で、私は踊り手代表（昨年は中学三年生）に賞を受取らせる。「君たちで獲得した賞だ、よく頑張ってくれた」連長としての喜びと、一種独得の空しさの交錯する複雑な心境、これは、現場の者のみのものである。

資料

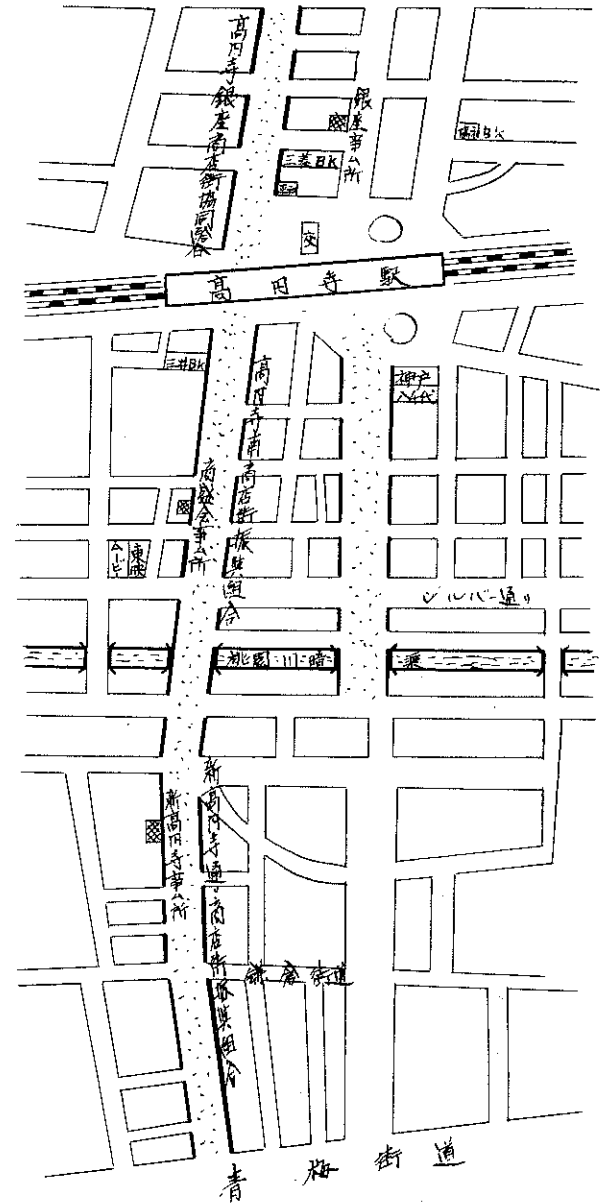
昭和四十八年度（第十七回）参加連一覧表

○印は四十六年以降の入賞連（但、四十六年人気連コンテストは六位迄とする）

連名	連長	員数	連名	連長	員数
○天狗連	中村和男	60	青年連	古屋敷勉	45
○葵新連	森田昇栄	60	三井銀行連	徳重克彦	40
○花菱連	藤井朝信	30	八千代銀行連	土橋元彦	40
○あすか連	関根敏邦	60	信託銀行連	三上憲	40
○江戸浮連	上原昭弘	35	大東京信用連	平八重幸	20
○のびゆく連	鈴木隆	60	第一勧銀行連	長利清隆	50
○シルバード連	栗田林七	25	○三菱銀行連	軽部賢二	60
○みどり連	深瀬正一	90	協和銀行連	西井十郎	60
○新高連	小林義明	85	○三和銀行連	秋本安次	50
○菊水連	熊木一義	35	信託銀行連	橋本宋次	50
○ひよっこ連	大野義春	40	富士銀行連	大久保喜太郎	45
○杉並民謡連	中屋ふじえ	50	永代信用連	長坂光太郎	45
○ちどり連	丸山繁	50	千代田生命連	武石貞叔	40
○すずめ連	青柳作平	80	○下北沢商店会連	阿部良三	40
○梅里しのぶ連	寺田緑一郎	50	金町あほう連	古宮仁助	30
○江戸っ子連	小川弘一	45	目黒銀座連	小林栄吉	50
○若駒連	伊藤基裕	45	○西武日産連	稲葉秀穂	30
○びっくり連	熊谷国広	60	○三越商事連	吉村義信	100
○杉の子連	熊谷重進	80	キヤン連A	大野勝彦	50
○あさがお連	根来重義	50	キヤン連B	保野勝彦	50
○いろは連	上村明男	45	キヤン連C	千葉輝武	50

昭和四十八年度阿波踊り路線図

印の部分が踊り場



あとがき

高田寺阿波踊り十八年の記録を書こうと思いついたのは、四十八年度の本番終了直後である。せっかちな私は、思い立つたが吉日と、その夜から、書き始め、寝る間をさいて少しづつ少しづつペンを進めた。

とほしい資料と、貧しい記憶をたよりに、とにかく、こんなものが出来ましたという他はない。記憶違いもあると思うし、私の理解の仕方に誤りある個所も多いと思う。

私としては、出来る丈客観的に冷静に記述したつもりだが、読み返してみると私個人の考え方がちよいちよい行間に顔を出している。始めこの記録は実行委員会名で作るのが妥当かとも思ったのだが、そうなると厳正な資料集めから始める大仕事になってしまふ。とてもそんな時間がないので、私なりの考えで書く事にした。その代り、執筆責任を明らかにしておく必要がある。その為に私の著作として公表する事にしたのである。

この小冊子を通じて、高田寺阿波踊りを正しく認識し、今後、何かのお役に立つことあらば、それに過ぎるよろこびはない。



この原稿執筆にあたって、最も参考にしたのは、高南商盛会発行になる機関誌、「ひろば」である。毎年八月前後に刊行されたものを読返すと、いろいろな人がさまざまに文章を寄せていて、資料として大変貴重なものである。そこには、ただ単に資料としてでなく、阿波踊りの渦に巻込まれた人々の哀歓を語る多くのものがあつた。それ等の中から、資料としても貴重であり、又、「読みもの」としても面白いもの数篇を収録する事にした。

私の文の足らざるを補って余りあるものと思う。

(関根敏邦)

夏宵苦勞夜嘯

小 沢 淳 男

フットライトを浴びた、けんらんたる舞台にも、裏方の苦勞がある。同様に阿波踊りにも、あの短時間の舞台の裏には積重ねられた苦勞がある。では順を追って述べてみよう。

先づ第一にスタイルの問題、今年はこの線でいこうと

いうアウトラインだ。次に警察への許可願、これは簡単にはいりません。同時に経費捻出のスポンサー探し、ひたすら低姿勢で我々はこれをセールスマンと呼ぶ。さかんにアルバム等を御覧に供していかば広告的価値があるかと熱弁をふるう、一日廻って零となると、がっかり。

その他、消防署に、深川木場参りとペコペコが続く。おまけに区整務務所に迄出掛ける事となる。区役所、区商連、都観光連盟等、自筆はもとより、代書屋のノロノロが気にかゝる。一方お囃子方は練習に熱が入る、ウルサイという事で会場を移す心配をしたり、太鼓が少ないので、ダンボールの箱をたゞ有様。ひたすらスタミナを鍛える事とする。衣裳係は浴衣の注文取り、足袋の文数を聞いて歩く、わからない時は文数のデッカイの間合に合わす事とし、繻絆にお腰に手拭もだ。宣伝係はスナックを写ったり、新聞屋さんに来て貰ったり、そうだが今年はこの手でゆこうと考え乍ら、チラシの広告もお願いしなくてはと考える。装飾係はスポンサーの注文通りの書体でと、提灯屋さんと、電気屋さん参りが始まる。小道

デクノボー敢闘記

うづまき連が宝橋にさしかゝった。余すところあと五分、秒読みとは大げさだが、踊りの進行を見たり、時計

バリ進まない。九時三十分丁度、先頭がやっと郵便局入口に着いた。ヤレヤレ無事に踊り終えそうだ。頭と体がジんワリと軽くなり出した……。

八時四十分三井銀行裏の休憩所に入った。汗をぬぐう暇もなく「サー！最後の踊りだ！」と道路の状況を見に行こうと歩き出したその時「デクノボーさん黄組は連絡ある迄待機して下さい！」との声を聞きながら道路を見る。ゾロゾロと人との行き交う人の波、警官は真赤な顔をしてマイク片手に大声で整理している。成程これじやとても無理な事と思いつゝ休憩所に戻って来た。やがて道路へ並ぶ為には踊り子が歩き出した途端、ドンドンガドンお囃子が待ち切れず鳴り出す。観客の足が止る。踊り子は道路に出られなくなってしまった。

「お囃子は末だやってはダメだ！」メガホンで大声を張りあげる。

踊り子全部がやっと一列に並び終るかなと思つた途端又お囃子がさつきよりハッスルして鳴り出した。先頭からお囃子までスッ飛んでいく。「まだまだ早いなだ！」歩いて道路に並ぶんぢや折角来たのに見れないわ、イ

具屋さんは万灯や太鼓の枠作り、警戒提灯の整備やらロソクやら。演出係は紙吹雪やクラッカーの仕入やら、照明がやたらと気にかかる。募集係は町会内部はもとより、外部への呼び掛け、飛び入りの選衡にヤキモキする。接待を婦人会にお頼みするやら、警備をお願いしたり、そうだ！駅の提灯、立看板の制作、ポスター、チラシの配布、宝橋の手すり、都有地前の下水の蓋、写真屋の手配、弁当の用意、接待用飲料、タスキ、連の編成、湯券、練習会場、テントも張らにや配線もせにや、おっと明日は警察へ許可書貰い、その後実地調査の立会だ、ヤレヤレ。

(昭和三十八年八月号所載)

城石昇

を見たり忙しい。お囃しはラストの早い調子をあげ出した。踊り子連も大いにハッスルして踊っているが、サッ

デワルナ人ね、皆踊りたいんだから踊らせればいいのに「ネ！」観客の声が聞に入る。「エライヤッチャエライヤッチャヨイヨイヨイ」踊り子も待ちきれずにかげ声が出て来た。緊張した空気が少しの間ほぐれてドット笑声が観客から沸きあがる。

「ドドンガドン、ドドンガドン」やっとうづまき連が踊り出した。

前の組のお囃子が威勢良く聞えて踊る様子とザワメキが手にとる様に見える様だ。

「本部の連絡があるまで踊りは一時中止。この状況ですと時間切れになるかも知れませんよ」と連絡係が飛んでくる。

「踊り子を早く出せ、今だ今だ！今踊り出さないと時機を失つするぞ！直ぐ出しなさい」の声も続けて飛んで来る。

「踊りの連は本部命令があるまで絶対に出ません」デクノボーの頑固な声で返事する。

「僅かですが人が空いて来ました。現場の警備の責任で出発して下さい。但し混乱のない様に踊り子を道路に並

べてから踊り出して下さい」警備の警官の連絡
「本部に連絡して許可あり次第出発致します」
「中止でないんですね、踊れるんですね」
「ア、良かった。踊れる。」

(昭和四十年十月号所載)

てくの棒

中川昌夫

踊る阿呆に見る阿呆同じ阿呆なら踊らに損々阿呆でないのは警備である。いやとんでもないデクノボーだそうである。

踊る阿呆が四百名、見る阿呆が廿七日八万、廿八日十五万(杉並警察署調べ)これをさばくのが百八十名のてくの棒である。てくの棒にもいろいろある。職務で警戒に当る警察官、消防署員、自発的に交通整理をして下さる交通安全協会の方々とは別格として、本当のてくの棒は町会の連長初め八十名いや新高円寺の方は違うかもしれない。では当ショッピングセンターの申し訳けないまことのてくの棒はこの私なのである。

「ものすごい人だなア！」
デクノボーの気持なんて関係ない。何と云っても踊り子が王様なんだから……………」

踊る人の楽しそうにリズムに乗って身体全体が溢れ出る陶酔感と喜びに満ちる顔、それを見る人は愉快に批評しながら「××連が一番上手じゃない」「いや〇〇連の方がいいよ。本場徳島から来ているんだらう」「家は浅草だけど毎年楽しみにしているんですの」「私は銀座からよ、ホラあの顔、あの踊り」「アハハ…………」「ホホ…………」笑いのうずに包まれている。

それにひきかえ、てくの棒は赤いタスキを胸に提灯を上には振りながら「すいません、誠に恐れ入りますがもう少しおさがり下さい。お願いします」ものすごい人出に圧倒され、けが人は出ないかしら大丈夫かな、笑いどこ

ではない真剣である。阿呆から見ればけわしい顔、それこそてくの棒である。

第九回目だというのに悲しいかな創始以来一度も阿呆になれたことはない。生来の不器用と図々しいくせに恥しがり屋で踊りは全く苦手である。

警備がいなければ踊りも出来ないのだぞ！ 負惜しみに

なる「そうだそうだ」何処からか声がかかる。又来年もてくの棒らしい。

阿呆からみればみるほどてくの棒
てくの棒提灯とられて立往生

(昭和四十年十月号所載)

無題

今枝滋且

楽しかった。確かにそんな気がした。そうでないとうのは自分の気持を曲げることになる。強いて天邪鬼を決め込めば、高円寺阿波踊りの無限の発展を願う連中からハミダン者にされてしまう。お祭り騒ぎとしては華麗であり上品でもある。参加して面白いものだと思うようになってきた。

離し方として、時に鉦をたゝかされ、時に太鼓を打たされるが周囲の人達に助けられ、今年も大過なく大汗かかず済ますことができた。爽かな面白さを感じることに

である。ただ与えられた職責を半ば義務的に果す手合であるから、この私達の高円寺の、余りに立派に成長した阿波踊りに対比して、腹の底からにじみ出るような深い感慨は無い。……………そうでもないのかな。結構心の中は今から来年の阿波踊りに気を廻わしているのかも知れない。ご存知ないは恥しがり屋の手前だけなのだろう。鉦や太鼓を手にしてすでに五・六年にもなるか、気がついたら大部、場慣れしてきているらしい。一晩に二十万人前後の人波に仰天しなくなっている。浴衣の下から長々

とステテコが出ていても、誰が見ているわけでもあるまいと、タカをくくるだけの余裕が生まれてきている。これだけの大行事を作り上げた理事諸公や各連長殿のご苦労は思いも及ばぬもの、成し遂げた後の快感は酒をウマクするだろう。その点、我々が如き棋盤の一步子に過ぎぬ者はそんな苦労がない。従って感慨も稀薄になるということなのだろう。心の底からの楽しみを求めぬなら頭を突込まなくてはならぬ。

我々が手合ひは慰労会に出る資格はなさそうである。慰労会と申せば、本当は家族、従業員諸氏こそ慰労に値いするものではないか。我々が離れ立て踊るから高円寺阿波踊りが成り立つみたいで実はそうでもない。稽古から本番までの長い間の家族従業員諸氏の協力は等閑にはできない。阿波踊りのあれだけの大騒ぎの中で、仕事と見物を兼合せるのは格段と気が散って仕方あるまい。

阿波踊りを振りかえつて

踊る阿呆に見る阿呆……………

踊る間は一体全体どうしているのか、騒いでいる連中は知りようもない。尤もこんな心配は力のない奴の僻事なのかも知れない。

鉦や太鼓をやらされ、場合によってはブラカードや提灯まで待たされるが、これでも踊りに食指が動く。生来「笛吹き」の性癖ではないが「ジャミセン」はこなす。これまでやれば「踊り」にも欲が出ようというもののである。そこでひそかに踊りの稽古をするのである。これは家人と云えどもその練習風景は公開しない。阿波踊りは単純明解な踊りである。にも拘らずその簡単な所がどうにも難しい。手振り誠にマズイ。姿見に映る動きは、「踊り」以前の体操に過ぎない。と云って、他人様のやっていること、成し得ぬ筈もない。先の先でよい、踊らされる様になってみたいと思うことである。

(昭和四十六年九月号所載)

国鉄 高円寺駅長
奥 村 秋 次

高円寺の街が阿波踊り一色に包まれた八月二十七・二十

八日、鮮烈なリズムに乗った踊りの渦は、見物客の渦と重なり合って、すっかり東京の人の心を捉え、高円寺に新しい心のふるさとを発見した想いは、私一人ではなかつたと思います。

四国に生れて東京育ち、街に溶けた踊りの情景は、すでに高円寺踊りそのものです。十五年の才月をかけて、

月日	区分	乗降人員	平日一日平均人員	差引増人員
八月二十七日		一六四、三〇〇人	一一〇、〇〇〇人	五四、三〇〇人(一四一%)
八月二十八日		一八五、九〇〇人	一一〇、〇〇〇人	七五、九〇〇人(一六八%)

以上の記録は駅開業以来の新記録であり、特に二十八

日の引上時には十一台の出札券売機では間に合わず、職員が臨時に手売りをする混雑ぶりでした。明年の対策には乗降客の誘導、乗車券の発売、ホームでの安全対策、更には企業の立場から集客対策についても充分留意し、地元関係の方々との密接な連携を図って対処してゆきたい

こんなにも成長したのは関係者のご努力と、高円寺の街の方々の美しい人情のさすなの故には違いありませんが、整然と、真面目で明るく、健康な行事は世相の移り激しい都心にあつて、貴重な伝統としてすでに他に比較出来ない重みとなつていくことは確かなことです。ちなみに当日の駅乗降のお客様の実績を見ますと、

いと思っております。

何れにしろ高円寺のふるさとの行事として不動な地位を築かれた阿波踊りが、街の発展と共に更に逞しく成長することを心から願ってやみません。

(昭和四十六年九月号所載)

阿波おどりに参加して

八千代信用金庫 高円寺支店
支店長 土 橋 元 彦

かねてより高円寺では年中行事として、阿波踊りが盛大に行われていると言うことを聞いていました。そしてこの行事には高円寺所在の金融機関もこぞってこれが行事に参加していると云ふことでしたが、実際に高円寺阿波踊りを見てみて、なるほどこれはすごい、聞くのと見るのでは大違いでした。

又見るのとやるのとはこれ又大違いでした。先づその当日渡された衣装と小道具の凝っているのはびっくりしました。豆しぼりの手拭、八千代と染めぬいた浴衣、角帯、こゝまではまあまあとして次に出てきたのは私がまだ一度もはいたことのない「はんだこ」と言ふ、まことに奇妙なものでした。こいつの前と後とがわからず苦勞しましたがよく考えてみればこいつは時代劇の股旅ものに出てくるやくざがはいているショートステテコだったのです。まあよくもこんなものまで揃えてきたものです。

阿波踊りに出場の経験あるものから、なにやかやと助けもらって身仕度だけは整いました。

「支店長の格構なかないかしますね」と女子職員におだてられ、まんざら悪い気はしませんでしたが、何分

にも初めての阿波踊りスタイルですから自分でとっくり

と自分の姿を見る迄は安心が出来ません、そっとトイレに入って鏡でみてみました。どうして、どうして捨てたもんじゃやない。少くとも背広にネクタイ姿よりは大部上等だわいと一人ぼくそえんで出場の時を今や遅しと待っていました。そろそろ出場の時刻という時になって、「店長!!この赤いタスキを掛けて、この御用提灯を持って連の先頭を歩いて下さい」と店長代理から言われた時は二度びっくりでした。みれば、連長と墨で書かれた真赤なタスキ、そして、銭形平次に出てくるあの御用提灯です。「おい本当に俺がこのタスキがけて、御用提灯持って歩くの」と反問してみたものゝ「前の支店長もやられました」には逆らう言葉もありません。

見物客の中には当店のお客様も多数おられるであろうに、その前をこの姿でと思ふと、何んともおもはゆい気持でした。

やがて私共の八千代連は十八米道路の出発点に勢揃いしました。そこには私達と同じスタイルで○●連△△連とそれぞれの連提灯を先頭にしたりおどりが多勢出発を待っていました。各連の奏でるやかましい程のお囃子、そ

して人いきれ、私は完全にその場の雰囲気呑まれてしまいました。

しばらくして私共八千代連に発売の合図がありました。

踊った阿呆

私の「阿波おどり」は昨年十一月高円寺支店に転勤になってから始まる。

先輩は、高円寺支店につとまるかどうかは「阿波おどり」をいかに踊るかにある。二日の踊りは重労働である……エトセトラ、エトセトラ、おどかされ続けて来た。

そして旅行に行けば「阿波おどり」お酒を飲めば「阿波おどり」果して自分は大じょうぶか? 高円寺支店に勤務する者の仕事の一つであるとはいえ不安であった。

六月頃から「ゆかた」の心配、どんなデザインが良いだろう。昨年使った小物は使えるか、経験者が少ないので練習をしなければ……他店からの応援はどの位、夜間営業の当店に取っては第一日目は誰が残って営業をす

私は精一杯に虚勢を張って第一歩を踏み出しました。もうその時は己の姿など些かも気にすることなく。

(昭和四十六年九月号所載)

平和相互銀行 高円寺支店
田 山 正 樹

るのか? 全員がそれぞれ持ち場を決めて八月二十七日

に向って作業を続けた。幸い天狗連のなみなみならぬご指導で、全員どうやらリズムに乗る様になって来た。八月二十六日、有志の方々の踊りに、リズムに心がうきうきして来たのはどうしたことだろう、仕事が手につかなくなってきた。早く明日に、自分も踊るぞ、仕事をしているのがつまらなくなってきた。二十七日「君は残って店の方をやってくれ、」連長からの指示にがっかり、しかしそれも本業、七時までは商売をしなければ……でもあの音楽リズムが仕事の手許をくるわせる、早く七時にならないか、そればかりの数時間であった。閉店後僚店から見学にこられたお客様もそこそこに、ゆ

かたに着替えて追っかけた。平和相互連はどこに、そして後半一時間踊って踊って踊り抜いた。

二十八日、さあ今日は三時間踊ってやるぞの意気込みでスタート、〃ひょうたんばかりが浮くものか〃私の気持も浮いて来た、ウイタ、ウイタ、ウイタ、〃さあ踊れよ踊れ、レモンや、つめたいおしほり、留守部隊からの差し入れて元気をつけて踊り抜く、お客様の声援、知った顔、あれあの方は前にいた店のお客様、ヨイヨイヨイヨイ!!

びっしょりになったゆかたをぬぐと身体に塩がふいていた。そしてビールの栓を抜く、いやーこのビールのうまいこと、阿波おどりとはいっしょにビールをうまく飲むための踊りを見つけたら、なんて思う程 先輩各位におこられるかなー 連長を囲んで楽しい座談、自然、話題は来年の踊りのことに：やっぱり笛があつた方がよい、女子の踊り子をふやしたらどうだろう、男子はもう少しふざけても：：反省が続く、そして夜が更けて行った。

踊る阿呆に見る阿呆、同じ阿呆なら

踊りゃに損、そん。

本当に踊らない人が阿呆に見えて来た。よし来年はも

っと面白い踊りを身につけるぞ、地元の先輩諸先生どうぞご指導お願いします。

(昭和四十六年九月号所載)

高円寺馬鹿囃子

昭和三十二年作

商盛会ほんほんくらぶ

一、水川の森に光り輝く

老舗ぞろいの高円寺

エライ奴ちゃエライ奴ちゃ

ヨイヨイヨイヨイ

踊る阿呆に見る阿呆

同じ阿呆なら踊らにヤンソン

二、踊りなされや皆様衆よ

高円寺自慢の馬鹿踊り

三、行きつ戻りつ南七丁

いつもネオンの灯が招く

四、朝な夕なにおいらの街よ

今日も栄える 商盛会

追 録

原稿完成の数日後、小沢淳男氏から、ひとつの資料をいただいた。

昭和三十二年つまり第一回高円寺馬鹿おどりに際してつくられた

阿波踊り〃の唄の替え唄である。

この唄は、練習した記憶があるが、本番には歌わなかったように思う。その為に大部分の人は、そんな唄が存在した事さえ憶えていないと思われる。

貴重なものなので、ここに収録しておく。